

そうさく
惣作遺跡

所在地 安城市木戸町
(北緯34度54分00秒 東経137度5分38秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 平成21年9月～平成21年11月

調査面積 900㎡

担当者 池本正明・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「西尾」)

調査の経過 調査は、愛知県建設部河川課による鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成16・20年度に次ぐ調査で、県道築堤下(09A・B区)および08A区の北隣(09C区)である。

立地と環境 惣作遺跡は鹿乗川の左岸に位置し、標高7m前後の自然堤防および後背湿地上に展開する。弥生時代後期～平安時代は遺跡中央を流路が斜めに貫流し、08A区～09C区では流路西側の自然堤防→後背湿地→自然堤防の順に展開する。

調査の概要 09A区は攪乱が激しく近世の流路を一部検出するにとどまった。09B区では弥生時代後期の竪穴住居跡、奈良～平安時代の溝を、09C区では古墳時代初頭の遺物の他、7世紀後半～8世紀前半の竪穴住居跡、9～10世紀代の柱列、そして上位検出面にて12～13世紀代の水田畦畔を確認した。

弥生時代後期 09B区は流路東側の微高地に該当する。竪穴住居2～3棟が重複して検出された。竪穴住居跡からは弥生時代後期の土器、それに掘り込まれた土坑からは古墳時代前期末の土器が出土した。当該期集落の一端とみられ、これまでの調査成果から集落域は80～100m四方の範囲におさまると推測される。

「寺」墨書 09B区019SDは東西方向にのびる溝で、下層からは8世紀後半～9世紀前半の須恵器が出土した。「寺」と墨書されたものもあり、南西方向に位置する寺領廃寺との関連が注目される。09C区では、自然堤防頂部の竪穴住居跡1棟が検出され、その周辺で7世紀後半～8世紀前半の須恵器が出土した。

09C区で検出された柱列は柵または塀とみられ、北西から南東方向にのびる。この方向は上面で検出した水田畦畔の方向と合う。またこれと同じ方向にのびる複数の溝も検出した。平行する溝は道路側溝の可能性もある。溝からは10～11世紀の灰釉陶器が出土した。

水田遺構 09C区の後背湿地部分を中心に、水田畦畔を検出した。畦畔で囲まれた水田は5～6m四方で、08A区の水田と方向や規模が同じである。畦畔は自然堤防上でも一部確認でき、当該期に一带の耕作地化が進んだとみられる。

自然堤防と集落 09C区では、周囲を後背湿地で囲まれた幅が20～30m程度の小さな自然堤防上において、遅くとも7世紀以降には集落が展開していたことが判明した。このような小規模集落は見落とされがちであり、今後は微地形の復元とそこに存在する遺跡への注意が必要となろう。

(永井邦仁)



惣作遺跡09B区弥生時代後期から平安時代前期の遺構全景(北から)



惣作遺跡09C区水田遺構全景(北から)